



NPO法人ささえあい人権医療センターCOML(山口育子理事長)ではこのほど、子ども版「いのちとからだの10か条」をまとめた。子どものころから命や体を大切に、医療機関を受診する時には“患者が主役”という意識を身につけて欲しいとの切なる願いから。「賢い患者になりましょう」とはCOML創設時からの合言葉であるが、なぜ今、子ども向けの啓発活動に取り組むのか。日々東奔西走する山口理事長に話を聞いた。

子ども版「いのちとからだの10か条」を作成

ささえあい人権医療センターCOML 理事長
山口 育子(やまぐち・いくこ)氏

大人になってから賢くなるのは難しい

COMLが活動を開始して来年で四半世紀を迎える。3年前に初代理事長である辻本好子氏を病で失い、事務局長だった山口氏が跡を継いだ。山口氏自身、辻本氏の右腕として、延べ2万件以上の電話相談にあたってきた豊富な経験を持つ。さまざまな人からの訴えを聞くにつけ痛感していたのは、「大人になってから行動変容するのは難しい」、「大人になってから賢くなるのは難しい」ということだった。

例えば、医療機関を受診する時も、基礎にあるのはコミュニケーション。「わからないことがあったら聞くとか、自分の思いを伝えるとか、主役になるにはコミュニケーション能力がある程度備わっていないと、賢い患者を展開していけない。アドバイスしても、医師が何か言うと、そこで困ってしまう」(山口氏)。こんな賢い患者になれない大人をたくさん見てきた。

また、世界的にHIV/エイズ問題が広がった際にも、感染予防の教育を行った国では数年後に感染率が激減したことから、将来的な感染者減少のためには10代前半からの教育が大切だと感じたという。「鉄は熱いうちに打て」ということだろう。

子ども向けの企画を形に

その山口氏、辻本氏が亡くなった後の1年はがむしゃらに突っ走ってきたが、次なる事業展開を考えるうえで、ずっと温めてきた子ども向けの企画を何とか形にできないかと思いついた。最初に思い描いたのは副読本で、今年2月に第1回のミーティングを開催。大雪の翌日にもかかわらず、医師、弁護士、ファイナンシャルプランナー、大学教員など20人が集まり、知恵を出し合った。また、第2回以降は議論の末、初めから副読本ありきではなく、結果として副読本になればよいとの総意でまとめ、患